「李登輝の箴言　未来の日本人へ」林建良著　発刊に思う

理事　袴田　忠夫

はじめに

２０２３年８月８日、「李登輝の箴言　未来の日本人へ」林建良著が発刊された。この本は、台湾の元総統であった李登輝が、生前日本の将来を心から心配されて林建良氏に託された７つの言葉からなる、極めて含蓄のある３６０ページにも及ぶ大作である。筆者はこの本を読んで、特に日本の全ての政治家の人にぜひ読んでもらいたいと思ったほどである。本書はたった一人で台湾を変革した李登輝の、歴史的交渉の舞台裏を、余すところなく記した白熱のドキュメントとも言えるものである。この本の監修をされた国際政治学者の藤井厳喜氏は次のように述べている。「李登輝は理想を持ち、その理想実現の戦いに勝利した人間である。理想はあれども、力弱く、敗れた人間ではないのだ。こういった点からも、李登輝の実践哲学、生きた哲学からは、多くのことを学びたいと私も思う。信念を持ち、哲学を以って生きるとは、難しいことだが、信念をもち哲学をもち、なおかつ闘争に勝利し、理想を実現するのはさらに難しいことである。そればかりでなく、更に人々から尊敬される人生を送るのは、もっと難しいことだ。・・李登輝は李登輝思想を残そうとした人ではない。李登輝はあくまで、独立、自由、民主、繁栄の台湾をつくる為に尽力し、日台の真の友好の為に献身した人物である。李登輝精神を活かすのは、本書を読む日本人であり、その精神を引き継ぐ台湾人である。李登輝本人は、自分の名前を冠した思想など残らなくても構わないと天国で微笑んでいることだろう。しかしこの偉大な人物を見れば、いやでも李登輝の生きた哲学を、あるいは李登輝思想を学びたく成るというのが自然の人の情である。特に若い日本人には、本書を人生のガイドブックとして読んでいただきたい。」

筆者は令和 2 年会誌郷友 9・10 月号で、李登輝元台湾総統の言葉として「自由で独立した台湾なくして自由で独立した日本はなく、自由で独立した日本なくして自由で独立した台湾はない、両国は運命共同体なのだ」を紹介した。更に同年の会誌郷友 11・12 月号では、「台湾の李登輝元総統の死と今後の対中戦略」と題し、次のように述べた。この李登輝元総統が 7 月 30 日、入院先の台北市内の病院で亡くなられた。97 歳であった。民主化を通じて、台湾の人々に「台湾人」意識を根づかせ、中国から自立した台湾の土台を築いた。李登輝氏は、日本統治時代の台湾で生まれ、京都帝国大学（現京都大）農学部に在学中、学徒出陣で陸軍に入った。１９４５年、少尉として日本で終戦を迎え、国民党独裁下の台湾に戻った。台湾大学を卒業後、農業経済専門家としての活躍が認められ、台北市長、台湾省首席などを歴任した。副総統だった１９８８年、蒋経国総統が死去し、台湾出身者として初めて総統に就任した。李登輝は蒋経国の残存任期を勤め上げた後の１９９０年、今度は自ら総選挙に出馬し、当選した。また、１９９６年には台湾総統選挙で、はじめて直接選挙を実現させ、初の民選総統となった。総統になってからも「私は 22 歳まで日本人だった」、「日本による教育によって今日の台湾がある」と語るほどの親日家であった。李登輝氏は平成 12 年に台湾の総統を退任して以降、計 9 回にわたり来日しており、各地で日本の歴史的人物の足跡を辿るとともに、日本人や

日本の政治家を励ましている。「台湾の声」編集長の林建良氏によると、「李登輝氏とお会いして話をすると、常に日本と台湾の関係であり、日本への愛情がひしひしと感じられた。話は全て日本語であり、李登輝氏は常に日本語でものを考えていた。日本の現在と将来、特に日本の中国への認識について常に心配していた」　令和２年７月 31 日、安倍総理は李登輝元総統のご逝去について次のように述べた。「李登輝元総統のご逝去の報に接し、誠に痛惜の念に堪えません。李登輝総統は日本と台湾の親善関係、友好増進のため多大なご貢献をされた方であります。そしてまた、同時に李登輝総統は常に、日本に対して、特別な思いで接してこられた方でもあり、また、台湾に自由と民主主義、人権、そして普遍的な価値を、また同時に日台関係の礎を築かれた方として、多くの日本国民は格別の親しみを持っています。李登輝総統のご逝去、誠に残念でありますが、改めて心からご冥福をお祈りいたします」と述べた。また、令和 2 年 8 月 9 日、森元首相と超党派議員３００人超からなる日華議員懇談会の弔問団が台北を訪れ、一行は李登輝元総統の追悼場が設置された迎賓館「台北賓館」で、李氏の遺影に花を手向けて弔意を表明した。これに先立ち、森元首相は総統府で蔡英文総統と会談し、蔡総統は弔問に謝意を表した。蔡総統は「李登輝元総統は台日関係を重視してきた。李元総統と皆さんの努力で台日関係は格段に向上した」と強調し、森元首相は「日本の政治家は皆、李先生を尊敬してきた」と述べ、安倍晋三首相からの伝言として、李登輝元総統への「感謝」を伝えた。また、森元首相は、日本と台湾のメディアの前で、李登輝氏の日本に対する貢献と感謝について次のように語った。「日本が敗戦の中でどちらかというと自虐的になり、自分たちの国の責任ということにあまり思いを強くしたために、日本に対する自信を持っていなかった。李登輝先生は勇気を持って、日本人がもっと自分たちの国に誇りを持つべきだと強くおっしゃっておられ、もっともっと日本人が日本人として、国際的な貢献ができるように努力しろと、そういう李登輝先生の教えだった。日本に対し、自信を持ちなさいと言ってくれて、敗戦国の日本が今日まで頑張り抜いてこられたのは、李登輝先生の教えによるものが大きかった」このように、森元首相は、李登輝氏の「日本は自信と誇りを持つべきだ」、「日本として積極的に国際貢献すべきだ」とのメッセージが日本にとって重要だったと指摘した。まさに日台間において、李登輝総統はかけがいのない人物であったとも言えるのである。

以下、筆者が会誌郷友でこれまで度々述べて来た李登輝と日本との関わりについて再度記述するとともに、「李登輝の箴言　未来の日本人へ」の日本人に対する 7 つの言葉の要点について、本書から抜粋記述することとしたい。

李登輝と日本との関わり

冒頭で述べたように、李登輝氏は平成 12 年に台湾の総統を退任して以降、計 9 回にわたり来日しており、各地で日本の歴史的人物の足跡を辿るとともに、日本人や日本の政治家を励ましている。最初の訪日は平成 13 年であり、岡山県倉敷市の病院で持病の心臓病の治療を受けた。16 年末から 17 年にかけては、日本統治時代の台湾で治水事業に活躍した八田興一や尊敬する哲学者・西田幾多郎の出身地である石川県、自身が通った京都大のある京都府などを巡った。19 年には、かねて念願だった「奥の細道」を探訪、芭蕉も参詣した宮城県松島町の瑞巌寺を訪れ、日本三景の一つ松島を見て「深川に芭蕉を慕ひ来　夏の夢」と自作の句を詠み、後に句碑も建立された。この時の滞在では、

先の大戦で日本人として出征し、マニラで戦死した兄が祀られている靖国神社に参拝、「62 年ぶりに兄と会えて、涙が出ます。長い間兄を祀ってくれて、ありがたく思っております。温かい気持ちになりました」と思いを語った。平成 20 年に沖縄県を訪問した際には、仲井真弘多知事（当時）などとの昼食会の席上で、尖閣諸島を「日本の領土」だと改めて表明した。

平成 21 年には、「台湾の民主化と政治改革に大きく影響した」と語った幕末の志士・坂本龍馬の故郷、高知県などにも足を延ばした。平成 26 年には、大阪府、東京都、北海道を訪れた。平成 27 年には、国会議員超党派有志による要請を受け、台湾総統経験者として初めて国会施設で講演し、後藤新平や八田興一を讃えるとともに「尖閣諸島は日本のもの」、「安保法制は世界平和に貢献」などと述べた。さらに福島県と宮城県も訪問し、岩沼市の「千年希望の丘」で東日本大震災の慰霊碑に献花し、犠牲者に追悼の祈りをささげた。平成 28 年には、石垣島を訪れ、台湾からの移住者等と親交を深められた。最後の訪問先が平成 30 年の沖縄であった。李登輝氏はこの時の講演で「日中間における尖閣諸島や南シナ海の問題など、絶えず周辺国家との緊張状態を作り出し、潜在的な軍事衝突の可能性を生み出している」と中国の強硬な海洋進出を批判、民主主義と自由を共有する日本と台湾が連携していく重要性を最後まで訴え続けた。李登輝氏の総統退任後の日本訪問について、林建良氏は次のように述べている。「台湾元総統の自分が日本に行けば、大問題になる。当然、中国は大反対であり、日本政府もメディアを含め否定的であった。しかし、李登輝氏は台湾の存在を世界にアピールするため、何としても日本に行きたかった。そこで、台湾の医療技術は日本と同等にもかかわらず、日本の先進医療を受けたいと申し出た。人道的口実を作ってしまえば、だれも反対できない。こうして、日本訪問のきっかけを作った。李登輝氏は、日本訪問により、民主化した台湾の存在というものを、特に日本人、台湾人、中国人に認めさせたかった」

李登輝精神とは何か

最初に、本書の冒頭で述べられている李登輝精神について述べてみたい。

本論文の冒頭で、李登輝元総統が令和 2 年 7 月 30 日、入院先の台北市内の病院で亡くなられた。97 歳であった。と述べ、また、7 月 31 日の安倍総理からのメッセージを紹介したが、本書では次のように記述されている。本来、97 歳の老人が亡くなるということは天寿を全うすることであり、それほど大きなニュースではないはずです。しかし、李登輝の死去は世界中のビッグニュースになり、ほぼ全ての新聞が一面で報道しました。日本やアメリカなど 60 数か国の国家元首や政府関係者、政治家など、多くの人が台湾に哀悼の意を表し、李登輝の死を悲しみました。しかし、97 歳の李登輝は権力の座から退いて 20 年も経ち、肩書もない普通の民間人でしかありません。かって権力の座に就いていたとは言え、一人の民間人の死がなぜこれほどのインパクトを世界に与えたのでしょうか？なぜ李登輝だけが特別なのでしょうか？李登輝という存在には、大きく三つの特徴があります。一つ目は「ミスターデモクラシー」と呼ばれるように、台湾の民主化を達成させました。二つ目は、彼は中国の圧力や恫喝に決して屈せず、最後まで中国に抵抗し続けました。三つ目は、いわゆる李登輝精神がある故に、彼は「哲人政治家」と呼ばれています。

世界中の人々が彼を惜しむ一番大きな理由、それは李登輝精神にあるのではないかと思います。

李登輝精神とは一体どういうものか。何によって形成されたものなのか。その神髄は何なのか。李登輝は「自分は 22 歳まで日本人だった」とよく言っていました。台湾は１８９５年、日清戦争に負けた清国から「化外の地」だとして日本に割譲されました。以後、台湾は日本が敗戦する１９４５年までの 50 年間日本の統治を受けました。台湾が法的に日本の領土でなくなったのは、サンフランシスコ講和条約が発効する１９５２年 4 月 28 日でした。その時代の台湾人は、その後の一生を日本文化の影響を受けて生きる「文化的日本人」と言える存在です。李登輝と同世代の台湾人医師、柯徳三（かとくぞう）氏の著書がありますが、その本の題名は、「母国は日本、祖国は台湾　或る日本語族台湾人の告白」（桜の花出版）といいます。この世代の台湾人にとって、心の祖国は常に日本であり、死ぬまで日本文化の影響を受け日本的精神をずっと持ち続けているのです。

李登輝精神の原点については、彼の渾身の作とも言える「武士道解題―ノーブレスオブリージュとは」（小学館刊）という一冊の本に凝縮されています。李登輝精神の原点にあるものは台湾人が台湾語でリップンチェンシンと呼ぶ日本精神です。日本精神という言葉は日本では聞きなれませんが、台湾では日本統治時代、そして今でもよく使われる言葉です。日本精神とは、台湾人が憧れる武士道精神であり、サムライ精神です。台湾人として生まれ、22 歳まで日本的教育と日本文化の薫陶を受けてきた李登輝は、戦後、中国人的社会に変わってしまった台湾で、自分の中にあった日本的精神、武士道精神を実践してきました。李登輝精神とは元来日本の中に存在する日本的なもの、武士道精神を中核とした日本的精神なのです。李登輝はそれを体現してきたのです。・・本書では、李登輝が 12 年間の台湾総統在任中、どのように李登輝精神＝日本精神を実践し、数々の難局を乗り越えて台湾を一党独裁から自由民主の国に変貌させたのか、中国の恫喝やアメリカの圧力に立ち向かって、台湾の主権独立を守り抜いたのかを紹介します。

誠実自然

「誠実自然」という言葉は、李登輝が最もよく好んで記した言葉で、座右の銘とも言えます。李登輝は日本統治時代の大正 12（１９２３）年に生まれました。そして 22 歳の時に日本で終戦を迎えるまで、人格形成期のほぼすべての期間に日本教育を受けました。日本文化によって教育された李登輝は、22 歳からは中国文化の環境の中で台湾人として仕事をしてきたのです。その違いは何か。後に彼が最も強調したのは、「日本文化とは誠の文化である。誠実さを中心とする文化である」ということでした。李登輝は、「あなたはどういう人間か？」と聞かれた時、「自分は戦前の日本教育によって純粋培養された人間だ」と答えていました。純粋な日本精神によって育まれた人間だという意味です。そして、「日本文化特有の精神とは何か？」と聞かれると、即座に「日本精神といえば武士道精神と大和魂だ」と答えました。この二つの精神には更に誠実であることと自然と調和することの二つの核があります。この二つの核の何れも中国文化にはありません。李登輝が「誠実」と「自然」という言葉が好きなのは、これが日本文化の核心だからです。「誠実自然」こそ自分の名誉を守るという日本人が台湾人に残した宝物です。誠実さと自然との調和は日本文化の原点であり、日本精神である大和魂と武士道精神の原点です。

「誠実自然」という言葉の「自然」には二つの意味があります。一つは気負わない、無理をしな

い、自然体でいると言う意味です。そしてもう一つは、自然との調和という意味です。李登輝が「誠実自然」という言葉をよく書くようになったのは、１９７８年、55 歳の時に台北市長になったころです。当時の台北市長は選挙で選出されるのではなく、李登輝は蒋経国の任命によって、台北市長になったのです。台北市長になる前の李登輝は、一人の学者として農学や経済を研究していたところ蒋経国の目にとまり、いきなり行政院の無任所大臣に抜擢されました。政治の世界に入ってまだ年月も浅いのに、李登輝は突然、人口２００万人（当時）の大都市・台北市のトップになったのです。彼にとって非常に大きな人生の転換点です。いきなり数百万人の人間を相手にすると、普通はどうしてもその気負いから自分を大きく見せたがるものです。馬鹿にされないためにできるだけ大きく見せるのです。当時は、周りはみんな中国からやってきた人間ばかりですから、台湾人がそのようなポストに就くという事は、本当に簡単なことではありません。しかし彼はその時、「だからこそ自然体でいこう」と考えたのです。気負わず、無理せず、自分を大きく見せることもせず、誠実にやっていこうと。当時自分を戒める言葉として、この「誠実自然」という言葉をよく書くようになったのです。

そして、もう一つの自然との調和ですが、実はこの部分もかなり重要です。なぜかというと、李登輝は自然との調和を日本文化の核心部分だと考えているからです。多くの台湾人が感じている日本人の美学とは、自然に対する感受性と調和性です。そして日本文化の神髄とは、もののあわれと、詫び、寂びを生活の中で見つけ出すことです。これはおそらく日本人しか持っていない感受性ではないでしょうか。李登輝は２００７年に日本を訪問し、奥の細道を歩きました。彼は帰りの飛行機の中で、また「誠実自然」という色紙を書きました。この時の「誠実自然」は自然の部分が重要でした。奥の細道を歩き、松尾芭蕉が句を詠んだ場所で、李登輝と夫人も句を詠みました。

深川に芭蕉を慕ひ来　夏の夢　　李登輝

松島や光と影の眩しかり　　曽文恵

それはまさに日本人の心の奥の、美に対する部分に触れたということです。その美とは、自然への感受性、そして自然との調和がこれほど自分の生活の中に溶け込んでいる社会は、おそらく日本以外にないのではないでしょうか。日本人のとても細やかな奥深い心、それこそが台湾人が日本文化に対して最も憧れるところです。

カネで解決できることは全て小事

李登輝はミスターデモクラシーと呼ばれています。なぜ彼がミスターデモクラシーと言われているかというと、それは勿論、台湾の民主化を達成し、無血革命を成し遂げたからです。民主化と一言で言うと、何となくそんなに難しくないように聞こえますが、当時の台湾を経験してきた者であれば、それがいかに大変なことか分かると思います。その当時の国民党による一党独裁とは権力、利益、軍隊、警察、情報機関も含めて、全ての情報を独占している状態でした。また、政治的な地位や軍隊が掌握されているだけでなくて、国営事業などの様々な利益団体も独占されていました。そのため、大勢の台湾人が、彼ら特権階級からこぼれ落ちた少しの利益で生きていました。独裁政権を民主化させるということは、彼等の利益を奪うことを意味します。彼等の利益を奪うことは至難の技です。当時、台湾人の李登輝は国民党の中枢にいましたが、彼には権力基盤がほとんどありませ

んでした。対して、中国からやって来た蒋介石、蒋経国の系統を継ぐ一派は、軍も警察も情報機関も掌握していました。独裁者や既得権益者としては、当然この権力を簡単に手放すことはありません。しかし、李登輝は彼等から権力を見事に奪い、奪った権力をすべての国民に捧げて、民主化を果たしたのです。

李登輝は１９９０年、国民大会によって総統に再選されると、今度は国会議員である国民代表の改革に乗り出したのです。いわば自分を選んでくれた恩人の首を切るということになりますが、彼にそうする力を与えたのは当時起こっていた学生運動でした。台湾では当時、野百合学生運動が起こり、学生たちは国民代表の全面改選を要求していました。李登輝は民間からの圧力をうまく利用し、万年議員を一人一人訪問して誠意をもって説得しようとしましたが、それだけではまだ足りません。そこで彼は、「ここでカネを働かせるべきだ。カネに働いてもらおう」と考えました。当時の国民代表は５６５名いました。この５６５名の議員はみんな年寄りです。それもそのはずです。１９４７年に選出されたのですから、１９９０年にはどんなに若くても 80 代です。彼等が最も心配していたのは「老後をどうするか」ということでした。「国民代表を辞めたら、今後の生活費はどうやって確保できるか」ということです。その時、李登輝は彼等に贅沢な退職金を出すことを考えつきました。どれくらい贅沢かというと、一人につき５００万台湾ドルです。30 年前の５００万台湾ドルは、当時の台湾の不動産の価値から推測すると、今の 10 倍ぐらいの価値はありました。つまり現在の５０００万台湾ドル、日本円にして約２億円に相当する金額です。それを５６５名分です。現在の金額に換算すると、日本円にしておおよそ１０００億円になります。１０００億円のカネを、この５６５名の国民代表の引退と引き換えにしたのです。さらにこのお金を貯金すれば、毎月、国の保証で 18%の年利がつくという条件まで付けました。つまり退職金の５００万台湾ドルをそっくり銀行に預けると、毎月 7 万 5０００台湾ドルの収入が得られるのです。今の価値に換算すると 75 万台湾ドル、日本円で２００～３００万円ほどが毎月利息として手に入る訳です。幸い彼等は 80～90 歳ぐらいの老人で、その先 10 年も 20 年もありません。彼等が存命中の短い間だけ、国庫から金利を負担するのです。常識的に考えれば、「国の金を無駄遣いしている。台湾に何の貢献もしていない老人たちに、何でこんなにカネを出さなきゃいけないんだ」と思うはずです。しかし、李登輝の考えからしてみれば、これこそが一番穏便なやり方だったのです。確かに当時の台湾の財政にとっては極めて大きな負担でしたが、もしその時、「財政負担になるから退職金は出せない」となったら、万年議員が居座るのは目に見えていました。議席に居座られたら、いざ改革をしようとする際、彼等の後継者が色々な反対意見を出してきたでしょう。お金と引き換えに憲法の改正に同意してもらったからこそ、国民代表が全面的に改選されたのです。それによって、今まで彼等に集中していた権力は国民の手に渡りました。そう考えると、１０００億円は安いのではないでしょうか。

若し李登輝が別の方法を使って解決しようとしたら、流血騒ぎが起きるほどの大惨事になって居たかもしれません。李登輝が一人一人説得してお金を出して、そのお金で台湾の民主化が達成できたのだから安い買い物です。台湾の政治改革全体は大事ですが、万年議員を引退させたことは、大きな解決の一つでした。これが、その後の改革を小事にしたかもしれません。・・そもそも李登輝は金銭には執着しない人間です。「カネを使うことで、軍事紛争を防げたり、台湾の地位を高めたり、

民主化を進めたりすることが出来るなら、どんどん使えばいいじゃないか」　カネに執着しない一方で、カネの使い方が実にうまいと思います。彼は「カネと権力と云うのは所詮借り物に過ぎず一時的なものだ。権力の座から下りたら、国民に権力を返すだけだ」と言って、恋々としないのです。彼は淡々と権力の座から下りました。人生に対しても同様でした。彼は、「人間はいずれ死ぬんだから」「カネも人生も一時的なものとして、あまり執着しない方がよい」という考えでした。「精神こそが生涯を貫いて高めていかなければいけないものだ。それは決して怠ってはいけない」と言い、その精神は後世に残っています。李登輝精神は、ひいては全ての台湾人、日本人、全ての人類の貴重な遺産になっていくでしょう。人間はカネと権力に執着し過ぎると器が小さくなっていって、結局何も残りません。人間にとって貴重なものは、他人から絶対奪われることのないものです。お金や財産、権力は人に奪われる可能性があります。しかし知識や知恵、精神や道徳は奪われることはありません。奪われないものこそ貴重で、後世にも残せるものです。

安易にカードを切るな

李登輝は１９８４年３月 22 日、蒋経国の指名を受けて副総統になりました。更に、蒋経国は１９８７年７月 15 日、38 年間にわたる戒厳令を解除しました。また、蒋経国は亡くなる 2 週間前の１９８８年 1 月 1 日、新聞出版禁止令も解除しました。それまで台湾の新聞は政府関係か国民党寄りの新聞しか発行できませんでしたが、反政府系の新聞も発行できるようになりました。これにより、台湾人は初めて言論の自由を手にしました。蒋経国は亡くなる直前までこういう難しい仕事をしてくれたのです。蒋経国は１９８８年 1 月 13 日、亡くなり、李登輝は憲法に則り副総統から総統に就任しました。就任したとはいえ、蒋経国の残存任期の残り 2 年 4 か月限定の総統です。李登輝が副総統から総統になったというニュースは、台湾人にとって驚くべきことで、想像もできなかったことでした。運命の巡り合わせによって、李登輝は初の台湾人総統になったのです。ただ、非力な李登輝が 2 年 4 か月の就任期間を無事に過ごすことが出来るのかが問題でした。政権基盤も安定していないし、力もない。そして誰もが彼はイエスマンでただの蒋経国の傀儡だと見ているので、暗殺される可能性すらありました。後年、李登輝はこのように言っていました。「自分は総統府の衛兵すら任命することが出来ない。果たして彼等は自分を守ってくれるのか、自分は暗殺されるのではないかという恐怖があった」と。そこで彼は、初めて蒋経国というカードを切ったのです。それは毎日ご遺体に祈りをささげることと蒋経国との会話メモの存在をほのめかすことでした。蒋経国が生きていたら、本当に彼を後継者に指名したかもしれません。それに李登輝は熱烈に台湾人から支持されています。この民衆からの熱烈な支持というのは、独裁政権下ではそれほど大きな力はありません。しかし、微力ながらも一助になっていることは紛れもない事実です。李登輝は「蒋経国の言葉をメモしたノート」というカードと「台湾人からの支持」というカード、このカードを使って、無事にこの混乱の時を乗り越えたのです。

多くの危機を乗り越えて１９８８年 7 月 7 日、李登輝が正式に党主席に就任した際、当時の心境について本人は次の四つのことをしようとしていたと語りました。一つ目は民主化を推進しなければいけないということです。これは李登輝が初めて「台湾の民主化を推進しよう」と決めた決定的瞬間でした。二つ目は国際社会への復帰です。三つ目は中国と対等な関係を構築することです。四

つ目は防衛力の整備です。この四つは全て台湾の生存に深く関わることです。
１９９０年 3 月 22 日に総選挙が行われ、李登輝は国民大会で総統の座を勝ち取ったのです。それからの 6 年間の任期の中で、憲法改正を 6 回行って台湾の民主化を大きく前進させました。この時、李登輝が切ったカードは 2 枚ありました。1 枚目は総統選の際に大いに利用した「李登輝情結」（台湾人からの熱烈な支持）、2 枚目は「メディアの活用」でした。李登輝は台湾の国際社会への進出を果たすため、外国メディアへの露出を増やしていきました。こうして、李登輝の存在は世界に知れ渡っていきました。国際社会からの注目が高ければ高いほど、李登輝の権力基盤も安泰になるのです。この 2 枚のカードがあって、李登輝は初めて台湾の民主化に着手できたのです。では、カードを切るベストなタイミングとはいつでしょうか。李登輝は剣道の有段者であり、剣を振る際には三つの原則が必要だと彼はいつも言っていました。「忍耐」「正確」「迅速」です。この「忍耐」がとても重要なのです。カードはむやみに切ってはならず、時期が熟するまで待ちます。これには忍耐が必要です。そしてカードを切る場合は、正確に切らなければいけません。いったん「切る」と決めたら、迷わずバシッと切らなければいけません。「時期が熟す」のは、それぞれの人生経験によって変わってきます。最も重要なことは、たくさんの失敗を経験することです。武道の稽古もそうですが、最初から全て正しく、あらゆる技がすぐに入ることはありません。何度も何度も失敗して、やっとそのタイミング、その時期、その瞬間を掴むことが出来るようになるのです。「稽古」という言葉は、できるだけ失敗をしてその瞬間を掴むという意味です。だから、人は年を取れば取るほど、時を待つことが必要だとだんだんと分かってきます。その「時」というのはいつなのかが、人生で最も大きな問題なのです。

敵を使える知恵と器量を

李登輝は、総統になったら全ての権力を握って「よし、これから台湾は自分のものだ」と思っていたわけではありません。後に本人はこう言っていました。「いや、あの時はもう怖くて、毎日暗殺されないように生きていくだけで精一杯だった」と。実際、彼には総統府の中の衛兵に命令する権限すらありませんでした。自分の警護を担うＳＰを自分で選ぶこともできないのです。もしＳＰが敵陣営の人間だったら、李登輝を暗殺するのは容易なことでした。ですから暗殺されないよう自衛しなければなりませんが、決定的な方法はありませんでした。結局、李登輝が取った安全策は「私は無害な人間だ。政治的野心もない。みんなあんたたちの思い通りにやればいい。私は?経国が残したポストを継いで、彼のやり残したことを続けてやるだけ、人事もそのままにします」と低姿勢を貫くことでした。それが彼の最適かつ唯一の安全策だったのです。敵だらけの世界で、「自分は無害な存在だから、潰しても何のためにもならない」というのは、赤ちゃんの戦略です。李登輝はこの「敵を作らない戦略」でピンチを凌いだのでした。蒋経国は李登輝を抜擢し、49 歳でいきなり閣僚にしました。これは、ある会社の社長が会社とは全く無関係な人を突然引っ張ってきて、役員にするようなものです。元からいた人からすれば、「俺はこの会社で 30～40 年働いて、ようやく役員になった。なのに、何も知らない俺より若い奴がいきなり役員とは」となるのは当然です。社長の気まぐれで、突然、「この人は明日から役員になる」と言われて面白いはずはありません。ましてや役員になった何年か後には、「副社長にする」ということになれば、今まで創業者と一緒に頑張ってきた幹部たちは納得いきません。「よし、これから副社長と一緒に頑張ろう」とはだれも思いません。更にある日、

社長が後任者についての遺言状も残さず急死してしまい、「社長が急死した時は副社長が社長になる」という会社のルールに則って、副社長が社長に昇格してしまった。そうなると、役員たちは渋々ながらも「ルールなんだから仕方がない。自分よりずっと後輩だが、副社長が社長になるしかない」となります。しかも、その役員たちは互いに仲が悪く、「次は俺だ」と、社長の椅子を皆が虎視眈々と狙っています。そこで、「この社長は所詮お飾りだから、数年もすれば追い出されるだろう。もうちょっとの我慢だ」と言って、それぞれの権力闘争に勤しみます。お飾りの社長より、目の前の敵を倒すのが先です。

「敵を使う知恵と器量を持て」という言い方がありますが、これは「敵を使いなさい」という意味ではありません。「敵」というのは、普通のライバルから生きるか死ぬかというゼロサムゲームと云うようなレベルまで様々です。ウサギにとって狼は自分が生きるか死ぬかという敵です。ですから、「敵を使う」ということは、とても危険なことなのです。敵を使える知恵、そして器量を持たなければいけないということは、敵はあくまでも敵という事です。敵を使う心得としては、まず自分のことを良く知ることです。自分の置かれた立場、実力を良く知った上で、敵のこともよく知る。敵の立場、力、背後の情報などを良く知った上で使わなければなりません。次に、敵を使う場合は、誠意を示すこと、小細工をしないということです。小さな策略を使ったりすると逆効果になります。敵を使うのは、必ず敵と共通の利益がある時だけです。共通の利益がなければ、お互いに協力し合うということは絶対にあり得ません。滅多に協力できない相手に小細工したり、くだらない策略を使えば、怪我をします。敵を使う時には、少なくとも敵に警戒心を持ちながらも誠意を示して、自分の度量を示し、くだらない策略をしないこと。その時だけでも誠意をもって協力し合うということです。そして自分の権力基盤、実力が弱い時にだけ敵を使うことです。自分が強い時は、敵を使うと言う禁じ手を使う必要は全くありません。敵を使うのは、あくまでも自分が弱い時、自分にとって力のある味方がいない時だけです。されから、実力のない敵は使わないことです。弱い敵を使っても力になりません。力にならないだけではなく、こちらの情報が敵側に流れてしまうということがあります。そして、その敵は必ずその情報を使います。なぜなら、力の弱い敵にとって情報が力になるからです。また、敵を使う時は、絶対に敵であるということを忘れず、近づき過ぎたり親しくなってはいけません。敵はあくまでも敵であって、必ず距離を置くべきです。目的の達成後は、必ず手を切ることも忘れずに。初めから手を切る準備をし、手を切る時期を考えておきます。それが敵であるということを最後まで意識しなければいけません。よく、「最初は敵だったけど、いろいろとやっているうちに友達になった」といった美談を聞くかもしれませんが、現実の世界ではこんなことはほとんどありません。敵はやはり敵なのです。ですから、友達にしようとしないことです。李登輝は敵を使って敵を倒してきたのですが、何事も、物事を成就させる際には「天の時」「地の利」「人の和」、この三つの条件が必要です。日本ではよく、「天の時」よりも「地の利」、地の利」よりも「人の和」と言います。確かに、自分の力が及ぶ範囲であれば、まず「人の和」です。それから「地の利」です。自分の力ではどうしようもない場合には「天の時」です。本来はこの三つが揃わないと物事は成就しません。その中の「天の時」は、私たちが自分で決めることが出来ないもので、それと同時に一番重要な部分であるかもしれません。ですから、敵を使うには、自分で考えるというより、「天の時」を待つ忍耐力も必要なのです。

トラブルメーカーになることも必要

李登輝がアメリカや中国からトラベルメーカーと呼ばれるようになったのは１９９４年のことです。この年、李登輝は南米コスタリカの大統領の就任式に呼ばれ、それに参加する途中にハワイで１時間半くらい給油のため立ち寄るというちょっとした事件が起こりました。この事件以降、李登輝はトラブルメーカーと呼ばれるようになりました。李登輝は蒋経国の残存任期を勤め上げた後の１９９０年、今度は自ら総選挙に出馬し、当選しました。その当時は国民の１票によって選ばれる直接選挙ではなく、国民大会の代表による間接選挙でしたが、それは確かに李登輝が立候補して、自分で勝ち取った総統のポストでした。それから１９９１年には１回目の憲法改正を行い、台湾の今の中華民国の統治権が中国に及ばないように改正しました。１９９２年には総統選挙を国民による直接選挙にするための憲法改正を行いました。これ等はかなりの大仕事でしたが、２年間は国内政治の改革に尽くしました。

そして自分の政権基盤がある程度安定した後、今度は台湾の国際的地位をアピールしていきました。これは物凄く大切なことです。それまでの国民党政権はずっと台湾は中国の一部であると主張していました。一方の中華人民共和国は、台湾政府は反乱を起こして中国から台湾に逃げた政権で、台湾は中国の一つの省に過ぎないのだと宣伝しています。台湾が中国の一つの省に過ぎないというのは、実は蒋介石・蒋経国政権の時の主張でもありました。しかしこの主張をこのまま継承していくと、いずれ台湾は巨大な中国に呑み込まれてしまいます。李登輝は、やはり台湾という独自の存在を国際社会にアピールしなければいけないと考え、１９９３年から二つの対外的運動をやりました。一つは国連加盟運動です。台湾は国連のメンバーではありません。国連に加盟できれば、世界の一員として認められるからです。二つ目は実務外交。台湾が国交を結んでいる国は非常に少ないので、ずっと国内だけにいるのであれば、台湾の存在を世界に示すチャンスもなくなってしまいます。だからできるだけ外に出るようにしました。台湾という小さな国と国交のある国は全部小さな国です。この小さな国から小さな国に訪問しに行くということには、誰も関心を持ちません。ですから李登輝は国交のある小さな国に訪問しに行く際に、できるだけ注目されるようにしようと考えました。それはどういうものかというと、トランジット外交です。例えば中南米の台湾と国交のある小さな国に行く際、飛行機で直接目的地まで飛ぶのではなく、途中でアメリカにトランジットして一旦停留するのです。給油の為に着陸して、また出て行くようにする。そうすると「アメリカの地を踏む」ことになります。「アメリカの地を踏む」ことにどういう意味があるかというと、やはり世界に注目されます。なぜ世界に注目されるかというと、アメリカの土地に立ちよる場合には、中国が必ずアメリカに抗議しますし、それを受けて、アメリカの内部では必ず議論が巻き起こります。民主国家である台湾がアメリカに一時的にトランジットして何が悪いのか、という意見が必ず出てきて、アメリカ政府は非常に難しい立場に立たされます。一方では中国から「台湾攻撃してきて、一方ではアメリカ国内だって民主国家ではないか、なぜ民主国家を排除して、独裁国家のいうことを聞かなければいけないのか」という意見が絶対出てくるのです。ですから李登輝が一番最初に取った行動は、１９９４年５月にコスタリカを訪問する途中、５月４日に給油のためにハワイに立ち寄るというものでした。ところがこの構想が出た途端、中国は時のクリントン政権を厳しく牽制しました。李登輝に絶対アメリカの地を踏ませてはならないと。当時のクリントン政権は、李登輝にトランジ

ットさせたくなかったのですが、「李登輝にトランジットさせるべき」という国内の声もあったため、仕方なく妥協策を取りました。この時に李登輝が乗ったのは政府専用機ではなくて、台湾の民間航空会社の飛行機を借りて特別機にしたものでした。その特別機がハワイで給油する際、アメリカ側が部屋を用意して、李登輝にその部屋で休んでもらって、給油が終わるまでそこで待ってもらうということになりました。ところが李登輝が乗った特別機がハワイ上空に着くと、民間空港ではなくてヒッカム空軍基地への着陸許可が出されました。ヒッカム空軍基地に着陸しましたが、空軍基地というのは政府要人を迎えるＶＩＰ室もないし、警備設備も整っていません。着陸した李登輝は、随行の秘書たちに、先に降りてどういう場所か見てくるように言いつけました。この時、アメリカ政府が用意したのは大変みすぼらしく薄汚い部屋で、とても一国のリーダーをもてなすような場所ではありませんでした。李登輝はこの報告を聞いて頭にきて、それなら出なきゃいいじゃないかと。飛行機から一歩も出ないと。そして今度はアメリカの方が困ってしまいました。一国のリーダーが給油のためとは言え、一時的にアメリカの地に着陸したのです。アメリカは台湾関係機関である米国在台湾協会の当時の代表であるナット・ベロッチ理事長を、李登輝を出迎えさせるためハワイに派遣していました。ところが李登輝が特別機から出てこない。出て来ないなら仕方ないから、特別機に乗り込んで挨拶でもしようかと、李登輝の特別機に乗りました。そしてその時李登輝は、なんとパジャマとスリッパのくつろいだ姿で待っているのです。李登輝は日本教育を受けて来た人間であり、かっては日本軍人でした。それは何を意味しているかというと、礼節をとても重んじる人間、身なりを重んじる人間だということです。その礼節を大切にする李登輝が、アメリカの代表が自分に会おうとやってきたのに、パジャマとスリッパでくつろいだ姿でいるというのは考えられないことです。これは李登輝からアメリカ政府にぶっつけた怒りの表現でした。表現というのは、口から言うと自分の品が下がります。パジャマが上品なのかと言われると上品ではないけれども、インパクトが物凄く強い。一国の元首が、自分の特別機とは言え、パジャマとスリッパ姿でアメリカの代表と会うというのは、みんな仰天したのです。これは一瞬にして、世界のビッグニュースになりました。総統の外国訪問ですから、特別機の中には大勢の随行記者がいたのです。ナット・ベロッチとのやり取りの様子も実は李登輝がわざと公開しているわけです。このことはすぐにアメリカ側に伝わりました。李登輝は結局 1 時間半、給油が終わるまで飛行機から一歩も外に出ませんでした。ナット・ベロッチがいくらお願いしても、頑として聞きませんでした。アメリカ全土にこのニュースが流され、アメリカのメディアや国会や国民が、こぞってクリントン政権を批判しました。なぜ大国であり民主国家であるアメリカが、独裁国家の中国に屈服したのかと。なぜ中国におもねって、民主国家である台湾の元首に屈辱的な思いをさせたのかということです。そして国会は、クリントン政権の李登輝への非礼に対する反発を具体的な形で表しました。事件が起こった後の５月 25 日、アメリカ上院の外交委員会は、全会一致である決議案を採択しました。その内容は台湾の国連加盟を支持する、アメリカと台湾の閣僚の相互訪問を促進するというものでした。そしてこれと同じ決議案が翌 6 月 10 日、上院で全会一致で採択されました。更に 6 月 30 日、今度は上院の外交委員会が公聴会を開き、クリントン政権の外交責任者であるクリストファー国務長官を国会に召喚し、一連の経緯を聞きました。なぜこんな非礼なことをしたのかと、散々つるし上げて批判したのです。クリストファー国務長官はしどろもどろで、国益の為とか、中国が怒るとか、いろいろ弁解しました。最終的には議員たちの圧力に屈して、「台湾との関係はこれから良い方向に調整していく」とい

う言質を取られたうえ、「確かに台湾の政治も経済もとてもよく発展している」と言わざるを得ませんでした。そして、その後の 8 月 5 日、上院は台湾の総統と高官のアメリカ訪問を支持する決議案を全会一致で可決しました。更に８月 12 日、今度は下院の超党派の国会議員 37 名が李登輝をワシントンに招待しました。結局、李登輝は総統在任中にはワシントンに行くことはできませんでしたが、しかしこれはある意味でアメリカの民意でした。クリントン政権はトランジットさえも許さなかったのです。ついにクリントン政権も民意の圧力に負けて、同年 9 月 7 日に新しい台湾政策を発表しました。今までの台湾政策の方向を修正したのです。修正した点は主に 2 点あります。1 点目は経済官庁の高官の相互訪問を認めること。つまり経済部門に限り、アメリカの閣僚が台湾に訪問できるようにして、台湾の閣僚もアメリカに訪問できるようにすると。実際、クリントン政権下でアメリカのエネルギー長官が台湾に訪問したことがあります。2 点目は台湾総統のアメリカ通過を容認すること。アメリカ訪問ではなくてアメリカ通過、トランジットです。台湾の総統が南米に行く際にアメリカを通過することを認める。通過というのはどういう意味かというと、空港から出ることを許されるということです。容認ということは、今度台湾の総統がどこか別の国を訪問する際には、途中、アメリカでトランジットして、空港から出て、人と会ったり晩餐会を開いたりすることが可能になるわけです。実際その後の台湾の総統、陳水扁や蔡英文などは何度もアメリカでトランジットして、アメリカの政治家やアメリカ在住の台湾人と会ったりしています。それがトランジット外交として台湾の外交の一つになりました。その年の 11 月に行われたアメリカの中間選挙では、結局民主党が敗北しました。この李登輝の一件がきっかけとなって、選挙ではアメリカの対中国政策、対中国の姿勢、対台湾の姿勢が論点になりました。この選挙で民主党は上下両院とも敗北し、親台湾的な共和党が両院とも過半数を取りました。その翌年の１９９５年 3 月 6 日、上院と下院それぞれが「李登輝総統のアメリカ訪問を歓迎する」という決議案を採決しました。これはかなり画期的なことです。なぜかというと、クリントン政権は今までトランジットすら許さなかったのです。そのパジャマ騒ぎによって、今度は通過なら許すとなった。クリントン政権からすればかなりの譲歩です。しかし国会ではこれでは満足できないという声が上がりました。李登輝総統を堂々とアメリカに訪問させるようにしなければいけない。これは民意だという意見が出ました。そして上院も下院も全会一致でこれを採決しました。

　１９９９年は中国の建国 50 周年の年です。10 月 1 日の建国記念日の前に台湾に会談しに来る。この時、台湾側は、台湾での会談の際に中国側が台湾と中国が最終的に統一すると宣言するような草案を出すかもしれないという情報を得ていました。台湾に事前の連絡もなく、統一草案をいきなり出すと、この会談は全世界が注目します。この時もし台湾側が「よしこれでいこう」となっていたら、おそらく今現在、台湾はすでに中国の一部になっていたでしょう。しかし、もし台湾がその時に席を立って拒否したら、どういう結果になるか、当時のクリントン政権は中国と同じような考えで、台湾に圧力をかけようとしていました。だから、台湾がこの提案を拒否したら、クリントン政権から激しい批判を受けることは免れません。「台湾は中国との平和の促進に消極的だ。やっぱり台湾はトラブルメーカーだ」と批判されるでしょ。李登輝の当時の方策としては、中国側の代表団が 9 月に台湾にやってくるのは確実なので、その前に台湾の法的位置づけの論述を打ち出すというものでした。台湾と中国の関係はこうなんだと言って、そして来るべき政治的談判、あるいはこれから待

ち受けるアメリカの強力な圧力に備えなければならない。中国から直接、統一協定を持ち込まれる前に、「台湾は中華人民共和国の一部ではない」ということを事前に証明する必要がある。そしてそれを全世界に公表する。そうすれば中国が万が一台湾を統一しようとした時に、「いや、我々台湾としてはこういう考えだから」と有利に交渉を進められるというのが、李登輝の考えです。現在の蔡英文総統は当時、李登輝のブレーンの一人で、国家安全会議のメンバーでした。李登輝は１９９８年、彼女をチームリーダーに任命し、若手の法律学者やベテランの外交官僚や国防官僚をメンバーとする台湾の法的位置づけを研究する専門チームを発足させました。台湾が法的に「一つの中国」の呪縛から抜け出せるように、国際法も含めて全部調べて、台湾の法的存在の根拠を明らかにし、説得力のある論述を出しなさいということです。その翌年の１９９９年５月に、蔡英文のチームは論文を提出しました。「台湾と中国はそれぞれ別々の国である」「少なくとも特殊な国と国との関係である」という結論を打ち出し、その結論に至った根拠を三つ上げました。一つ目。「中華人民共和国は１９４９年に成立した後、１秒たりとも台湾を統治したことがない。だから中華人民共和国が台湾の統治権を有するという主張は理論的には根拠がない」二つ目。「１９９１年の憲法改正によって、我々台湾は中華人民共和国の中国における統治の合法性を認めた。そして我々台湾の統治権も中国大陸には及ばないと憲法に明示している」三つ目。「１９９２年の２回目の憲法改正によって、１９９６年以降、台湾総統は台湾の国民によって直接選ばれるようになった。拠って台湾の国家統治の正当性は台湾国民に在り、中国の国民にはない」　これら三つの法的根拠により、「台湾と中国はやはり国と国との関係、少なくとも特殊な国と国との関係である」と結論づけたのです。この結論を見て、李登輝は大変満足しました。よくやったと。この結論は後に「二国論」と呼ばれるようになりました。ではこれをいつ発表するか。

　偶然にも１９９９年７月９日、ドイツ国営放送のドイチェヴェレが李登輝にインタビューに来ました。インタビューの質問は事前に台湾に送ってきます。そしてなんと一番目の質問は「台湾は中国から逃げて来た、反乱を起こした一つの省というふうに言われていますが、総統閣下はどう思いますか」というものでした。李登輝は、ここで二国論をちゃんと言うべきだと思いました。李登輝はドイチェヴェレの記者にはっきりと「台湾と中国は国と国との関係である。我々は反乱を起こした中国の一つの省ではない。少なくとも、特殊な国と国との関係である」と答えました。そして、憲法改正や台湾国民による総統の直接選挙などの法的根拠についても、丁寧に説明しました。同じ日に、李登輝はアメリカから訪れた宗教団体とも会見しています。その会見では、彼はもっとはっきりと言いました。「一つの中国、いいではないかと思う。我々も一つの中国を支持する。しかし、台湾はその中に入っていない」と言ったのです。これが台湾と中国の法的関係が完全に切れた瞬間でもあります。台湾のリーダーがこのように宣言したということは、これはある意味で独立宣言に匹敵するものです。台湾が中国の一部ではないと明言した瞬間。１９９９年７月９日でした。翌日、当然これは世界のビッグニュースになりました。台湾の新聞、テレビは全部この李登輝の二国論に関する報道で埋め尽くされました。当時、李登輝は国民党の主席であり、与党である国民党内部からの異論はありません。そして独立志向である野党の民進党も当然これに反対しません。皆が大賛成なのです。だからどの台湾の世論調査でも、李登輝の二国論は過半数の支持を得ています。最高では 75%の民意が、その通りだと、台湾と中国の関係は国と国の関係なんだと、この二国論に賛成していま

した。

中国はもちろん大反対ですが、アメリカは台湾に対して水面下で圧力をかけてきました。7 月 22 日には台湾関係の責任者であるリチャード・ブッシュ米国在台湾協会理事長を台湾に派遣しました。リチャード・ブッシュは李登輝に二国論を撤回するようにと圧力をかけにきたのですが、7 月 23 日に李登輝と会見した際、李登輝は一歩も譲りませんでした。李登輝は、「この関係をはっきりさせた方が台湾のためになるし、中国のためにも、アメリカのためにもなる。つまり関係が曖昧な方が不安定で、はっきりさせた方が安定するのだ。それがやがてアメリカと中国と台湾のためになるのだ。平和の保証はまずここからだ」と一生懸命リチャード・ブッシュに説明しました。

更に李登輝は、10 月 27 日にアメリカの政治論評誌「フォーリン・アフェアーズ」に現職台湾総統の肩書で堂々と論文を投稿しました。この論文でも同じように台湾と中国は国と国との関係であり、曖昧にしているのは台湾にとって不公平だ、とはっきり強調しました。これは間接的にアメリカの戦略的曖昧さを批判している言葉です。なぜ不公平かというと、曖昧さによって台湾は対等の地位を得られないからです。中国は台湾を代表することはできない。中国の今の共産党政権は中国人にさえも選ばれていない合法性のない政権であり、自分の国でさえも合法性がないのに、台湾を統治できるなどということは、台湾人は到底受け入れられない。そして、北京が民主主義を阻むのではなく擁護するならば、それこそ世界の利益につながるが、今の北京は台湾の民主化を阻害しているのではないかと指摘しました。「国際社会は中国の側に立つのではなく、台湾を新たに理解すべきだ」とも主張しました。「新たに」というのは、台湾はもはや蒋介石や蒋経国政権の時代ではなくなったのだと。「台湾はもうすでに台湾人の台湾に生まれ変わったのだ。だから国際社会は台湾にふさわしい国際的地位を台湾に与えるべきではないか」と訴えたのです。大変格調の高い論文で、民主党や左派も含めたアメリカの知識人の間で非常に高い評価を得ました。その後、アメリカ政府は相変わらず「従来の対中国政策、台湾政策は変わっていない」と言いながらも、二国論を批判することはなくなりました。後にアメリカ政府が台湾に伝えたメッセージは、我々も二国論に反対しているのではなく、このような重大なことをいきなり発表するのではなくて、事前に相談してほしかったということでした。かなりトーンダウンしたのです。しかし台湾の立場からすれば、特に李登輝の立場からすれば、これほど重大なことだからこそ、もし事前に相談すれば、アメリカに反対されることは目に見えるわけですから、李登輝の胸中としては重大なことだからこそ相談はできないのだと。リーダーとはこのような肝っ玉の据わった人間でなければいけないのです。

信仰心を持つことはリーダーの最重要条件

李登輝は様々なリーダーと会う中で、「リーダーの特質とは何か」を考え、三つの共通点を見出しました。１点目は、優れたリーダーは夢を持っていること。２点目は、周囲の人に感染するほどの熱い情熱を持っていること。３点目は、強い指導力を持っていることです。更に李登輝は、いろいろなリーダーを見て、そして自身の 12 年間の総統在任期間を経て、優れたリーダーになる五つの条件をまとめました。

第一の条件は、信仰心を持つことです。自分より一段高い次元の存在があると信じること。そして、自分には神様がついていると信じることつまり、信仰心を持つことが１点目です。第二の条件は、

何時でも権力を放棄できるという気持ちを持つこと。権力にしがみつかず、引くべき時は引くことです。第三の条件は、公私の区別のできる人になることです。公私混同するリーダーは最悪です。第四の条件は、人の嫌がることを真っ先にやることです。世の中には、嫌なことを部下に押しつけるリーダーも大勢います。しかし、それはいいリーダーではありません。第五の条件は、誠実に対応することです。これは、カリスマの真似をするな、自分を飾るなということです。世の中には、「カリスマ性があれば自然と人がついてくる」などとカリスマ性を強調するリーダー論がたくさんあります。しかし、李登輝はカリスマについて全く評価していません。彼は「カリスマは支持者の幻想にすぎない」と言っていました。幻想はいつか必ず消えます。幻想が消えてしまえば、悲惨な結末が待っています。自然体、誠実さこそ重要であると思っていました。そして、李登輝がこの五つの条件の中で最も重視していたのは信仰心です。信仰心があれば、いいリーダーとしての力を発揮できるし、困難にぶつかっても立ち直れます。信仰心イコール宗教ではありません。彼はクリスチャンですが、信仰心を持つということとキリスト教信仰は関係ありません。彼はそれを常に強調していました。仏教、イスラム教、神道などを信仰してもいいし、無宗教でもいいから、自分を超越した何か偉大な存在、宇宙に自分よりもう一段高い次元が存在することを信じることだ。それによって、力をもらい、正しく進むことができ、挫折した時も立ち直ることができると。

李登輝は、どのように神様の力を借りて困難を乗り越えて来たのでしょうか。ここに李登輝の最後の著書があります。李登輝が亡くなった後、２０２０年 10 月に日本語訳「主のための証　李登輝の信仰告白」（海鳥社刊）が出版されました。この本は、李登輝が 12 年間の総統在任中に 50 回もの重大危機に直面し、その度に神様の力に頼って乗り越えてきたというエピソードが書かれています。李登輝は、問題が起きると、まずは夫人と一緒に祈ります。祈った後は「聖書」を無作為に開き、適当なところを指差して読み、そこから神様のご意志を見出そうとしました。総統在任中の 12 年間で 50 回も発生した危機全てを、この方法で乗り越えました。例えば、１９８８年 1 月 13 日、蒋経国総統の急死によって、李登輝が副総統から突然総統になった時は、誰もが「これでいいのか？」と思ったことでしょう。実際、何の力も派閥もないまま、国民党陣営に入り、形式的にでもトップになるということは、とても危険なことです。彼は、その夜家に帰って、夫人と一緒にお祈りをしてから、「聖書」を開いて読みました。著書の中に、夫人が当時書いたメモの写真が掲載されています。その時開いたのは、「詩編」73 章の第 23 節と第 24 節でした。第 23 節にはこのように記されています。「けれども私は常にあなたと共にあり、あなたは私の右手を保たれる」。第 24 節にはこうあります。「あなたはさとしをもって私を導き、その後、私を受けて栄光にあずからせられる」。「詩編」は神様に対する祈りです。神様の助けを求める祈りでもあり、「詩編」を読めば、李登輝は冷静になることができます。そして、「大きな責任をこれから背負っていく」という覚悟も出てきて、勇気が湧いてくるのでした。

１９９０年、李登輝は蒋経国の残存任期を終え、国民大会での間接選挙によって正式に総統に就任しました。この選挙では、彼を総統にしたくない勢力が軍と結託していたので、クーデターの可能性もある不穏な状態でした。その権力闘争の中で、曽文恵夫人が、涙ながらに李登輝にこう懇願しました。「もう選挙に出ないでください。総統を辞めてください。蒋経国の残存期間２年間で終わ

りにしてください」これを聞いた李登輝は、夫人と一緒に祈ってから「聖書」を開きました。開いたページは、「イザヤ書」の第 37 章第 35 節で、こう書いてありました。「私は自分のため、また私の僕ダビデのために町を守って、これを救おう」。李登輝にとって、これは神様からの啓示でした。李登輝には、「神様が私を守ってくれる。そして私の国を救ってくれる。だから私がやらなければいけない」と読めたのです。また、李登輝は、「人間が追及すべきものは、眼に見えるものだけではなく、自分だけのためでもなく、できるだけ人のため、公義のため、社会のために尽くす。それこそが人間の生きる意味ではないか」と考えました。生きているうちにできることは何か。できることをやることによって、いかに社会に、人に貢献できるか。リーダーである人間は、信仰心、慈悲、寛容を持って、社会的公義のために働くべきではないか。それが、李登輝のリーダー論です。

私は私でない私　李登輝哲学の集大成

この「私は私でない私」という言葉は、李登輝が昔から使っていたものではなく、90 歳を過ぎてから使うようになりました。それまで彼が良く使っていた言葉は「誠実自然」「真実自然」です。この「誠実自然」と「真実自然」は、まさに日本文化の根本的な部分だと言えます。日本文化の一番根幹になる部分は「誠実さ」で日本文化特有のものです。自然を尊重し、ありのままのものをこよなく愛するというのが、日本文化の原点です。李登輝は、この「真実自然」を強調しながら、一方では「私は私でない私」と言っていました。「私は私でない私」というのは、「変化している私」ということを意味します。これは、宇宙の法則とも言えるものです。宇宙の普遍的な法則はただ一つ、「万物全てが日々変化している」ということです。つまり、全てが変化するということが、不変の法則なのです。人間も同様にすべてが変化していきます。少年時代の李登輝は、とても我が強い人でした。彼自身がそう回顧していました。「自分が、自分が」という思いが強い人だったそうです。成長した彼は、この我執からどうやって解脱すればいいか考えました。つまり我執から無我になろうとしたのです。彼は多くの本を読み、19 歳で京都大学に入りました。その後日本の陸軍に入り、22 歳の時、名古屋で終戦を迎えました。それからしばらく日本に滞在していました。その間、爆撃で廃墟と化した戦後の日本と、その中で苦しむ多くの国民の姿を見ることになります。台湾に戻った彼は、「唯心論では民を救えない」と確信し、一転して共産主義の学習会に入り、唯物論の信者になりました。我執を捨てるために、西田幾多郎やカーライルの哲学を勉強していたのに、戦後は一転してマルクス思想を勉強し、唯物論者になったのです。それからおよそ 10 年間、唯物論、社会主義、共産主義の本を読み漁りましたが、「これもちょっと違う気がする。これでは人を救えない」と、今度はクリスチャンになったのです。クリスチャンになった後、2 度のアメリカ留学を経て、蒋経国の抜擢によって 49 歳で入閣を果たしました。李登輝は、天才的な人ではありません。頭のいい人ではありましたが、天性の頭の良さではなく、努力家としての頭の良さがありました。特に、彼の知識に対する情熱は、人並外れたものがありました。彼はとても好奇心旺盛な人で、90 歳を過ぎてからも少年のような好奇心を持っていて、毎日夜遅くまで勉強していました。もう一つ、李登輝が情熱を注いだのは、民に対する慈しみでした。国民を慈しむ気持ちはことのほか強く、彼の言動にはそれがよく表れていました。ここが、ほかの指導者とは違う点です。李登輝の精神の道のりは、いかに我執を捨てるかから始まり、唯心論に入って唯物論に移り、最後にクリスチャンになりました。様々な文化の影響を受けながら、権力のトップに上り詰めた李登輝が得た結論は、私心があってはいけないとい

うこと、そして自分を超越しなければいけない、この二つでした。そこで出てきたのが「私は私でない私」という言葉でした。この言葉には二つの意味が含まれています。一つ目は「超越」、自分が自分を超越し、成長していくという意味。二つ目は、「無私」、我を捨て、私から公になるという意味です。李登輝は、まさに「私利私欲を殺して公に尽くす」ということを自分なりに生涯実践してきました。その結果、「誠実自然」「真実自然」から、90 歳になって「私は私でない私」と悟ったのです。「覚悟」という言葉があります。「覚」は覚えると言う意味です。「悟」は悟（さと）りです。人間は学習して最後に悟ります。悟りとは諦観です。諦観というのは自分を公、宇宙に委ねるという心境です。そのような心境になるためには、私を抑えて公に尽くせばいいのです。

人は、宇宙の摂理に会うような哲学に則って生きることで幸せになれるのです。この哲学を実践し、私利私欲をできるだけなくして生きることで、人としての幸せを感じることができます。これが、李登輝が 90 歳になってから悟ったことであり、彼が晩年によく口にした「私は私でない私」という言葉の意味なのです。自分だけのものを追求せず、できるだけ無私の精神で公のために尽くすことが、自分の幸せにつながるのだという教えです。

おわりに

林建良氏は、「李登輝の箴言　未来の日本人へ」を終えるにあたり、「人類共同の財産、李登輝哲学を後世に伝えたい」とし、次のように述べています。

本書「李登輝の箴言」は、「誠実自然」から始まって、「私は私でない私」で終わりました。これは、李登輝思想、もしくは李登輝精神、李登輝哲学の精髄と言えます。ここで紹介した李登輝の箴言は、全て李登輝が自分で経験してきたものであり、戦後台湾の凝縮でもあります。李登輝は偉大な人物ですが、雲の上の人のような近づきがたい偉人ではありません。国の指導者でもあったにもかかわらず、威張ったり、格好つけたりせず、常に腰が低く、誰にも親切でした。人と約束する時は、どんなに忙しくても、5 分か 10 分前には必ず約束の場に来て、待っていました。自宅に来客がある時は、玄関先まで客人を出迎えました。国家の指導者らしからぬ行為ですが、彼は全く飾らない人だったので、自然とそういう行動に出てしまっていたのでしょう。彼には太陽のような暖かみのある偉大さが備わっていました。李登輝哲学には、三つの要点があります。第一の要点は、李登輝哲学の原点である「日本式教育」です。李登輝は、戦前の台北高校、つまり日本の旧制高校の出身です。それから京都大学に進学し、２年間学んだ後、日本の陸軍に入りました。

李登輝の経験した日本式教育とは、当時のエリート教育そのものでした。当時の日本は、国を背負う若いエリートたちに全人的教育を施していました。全人的教育とは、専門知識だけではなく、幅広い分野にわたる教育です。李登輝の専門は農業経済学でしたが、彼の学んだ知識は、農業や経済だけでなく、文学、哲学、芸術、音楽なども含まれました。更に武道も教育の一貫でした。文武両道の教育が、全人的教育だったのです。李登輝も日本人エリートと共に、そうした教育を受けました。それが李登輝精神、李登輝哲学の原点となりました。そして戦後の混乱期を経て台湾に帰り、台湾大学で学んだ後、アメリカに２度留学しました。その時の李登輝には、台湾人がもともと持っていた台湾本土の思想、日本の全人的教育から受けた思想、台湾大学で学んだ中国的思想、アメリカ

留学を経て身につけた西洋的教養、これら全てが備わっていました。２度目のアメリカ留学から台湾に帰国してまもなく、学者から政治家になりました。当時の台湾の政界は、完全に中国式の政界でした。蒋介石政権が残した中国の宮廷的な政治闘争が、台湾の政界でも繰り広げられていたのです。李登輝は、否が応でもそれらを自分の目で見ざるを得ず、確かめてきました。１９８８年、意図せずして総統になった後も、中国式政治に巻き込まれることなく、彼らしく一歩一歩、着実に地に足を付けた政策を行い、台湾のために尽力してきました。そのプロセスにおいて具現化されたものが李登輝思想、李登輝哲学の本質的な部分です。李登輝哲学の第二の要点は「実践の哲学」であるという点です。「李登輝の箴言」とは、李登輝個人の歴史と戦後台湾の歴史が重なったものです。激動の時代を駆け抜けた李登輝が、身を以って実践してきたものの集大成です。それは、単に高邁な理想や、現実に存在しないような口先だけの思想ではなく、全てにおいて実践でる哲き学です。三つ目の要点は普遍的原則があるということです。普遍的原則とは、時代、地域、国籍に関係がなく、世界の全ての場所や人に適応する哲学のことです。政治家でなくても、仕事、分野、年齢を問わず、どんな人にも適応します。私は運よく李登輝と出会いました。出会ってからの 20 年間、私が自分の目で見てきた李登輝は、やはり偉大でスケールの大きな人でした。一方で、親しみやすい人でもありました。彼は決して天才ではありませんし、何でも分かるわけではありません。彼は至って謙虚です。しかし、97 年間の人生の中には、日本、台湾、中国、西洋、アメリカの思想の全てが一冊の哲学書のように凝縮されていました。李登輝は、２０２０年 7 月 30 日にその生涯を閉じました。しかし、李登輝精神は決してなくなることはありません。同時に、李登輝精神、李登輝哲学は、台湾のみの財産ではなく、人類共同の財産なのです。その人類全体の財産である「李登輝の箴言」を文字にして後世に残すことは、一人の台湾人として果たすべき使命です。李登輝精神は永遠に不滅です。

筆者は冒頭において、以前の会誌郷友で李登輝元台湾総統の言葉として「自由で独立した台湾なくして自由で独立した日本はなく、自由で独立した日本なくして自由で独立した台湾はない、両国は運命共同体なのだ」を紹介した旨を述べた。また、本年の３・４月号の会誌郷友で１月８日、自民党副総裁麻生太郎氏は、福岡県で開かれた国政報告会で、「台湾海峡で緊張が高まっている。台湾には 2 万人余りの日本人が暮らしている。台湾海峡で戦争となれば、日本は潜水艦や軍艦で戦う。台湾の有事は間違いなく、日本の存立危機事態だ」と発言した。と記述したが、果たして日本は本当に台湾のために戦えるのか？という疑問は当然に起こってくると言えよう。何故なら、多くの日本人は、日本と台湾は法律上の国交が無いから、台湾有事の時に自衛隊が動くことは難しいと考えているからだ。筆者は、以前から日本が存立危機事態にあるにも関わらず、自衛隊が全く動けないのは本末転倒であると思っており、麻生副総理と同意見である。「台湾有事が日本有事」という認識であるならば、日本有事の為に存在する自衛隊が全く動けないと言うのは、そもそもおかしいと言えるのではないかとも述べた。日本と台湾にとって中国の脅威が厳然として存在する今日、日台間連携の法律制定が急務であると言えよう。